

2—2—3. ボランティア活動に対する意識レベル別の分析

(1) ボランティア活動に対する意識レベル

今回実施したアンケート調査においては、ボランティア活動への「過去の参加経験」及び「現在の関心の有無」という2軸を用いて、活動に対する8段階の意識レベルを設定し、この意識レベル別に分析を行うことができるようにした。この8段階は、AIDMAの法則の5段階のうち、「行動（実践）」を単発的なボランティア活動の参加経験と継続的な参加経験という2種類に分け、さらに「関心なし（過去も現在も興味・関心がない）」と「関心喪失（過去には参加経験があるが、現在は興味・関心がない）」という2つを追加したものとなっている。

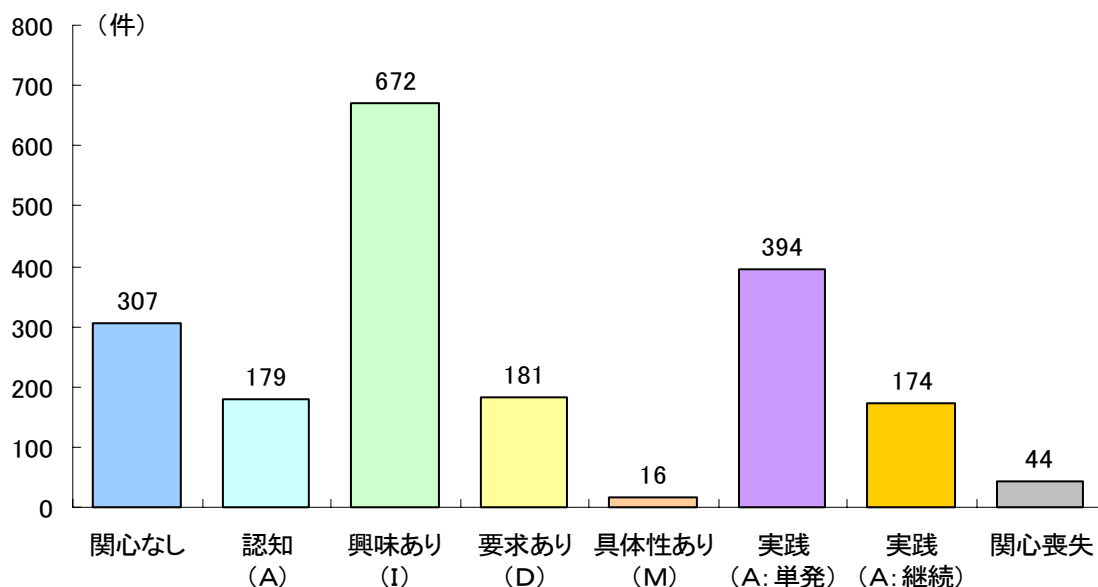
図表 2-3 4 ボランティア活動に対する意識レベルの枠組み

			今後のボランティア活動への参加に対する興味・関心			
			興味・関心あり			特に興味・関心はない
			興味・関心があり、具体的にやりたいことがある（継続を含む）	興味・関心があり、なんとなくやりたいことがある	興味・関心はあるが、やりたいことはまだわからない	
最近5年間の関心や参加の経験	参加経験あり	定期的・継続的なボランティア活動に参加したことがある	⑦実践（継続） (A)			⑧関心喪失
		単発的なボランティア活動に参加したことがある	⑥実践（単発） (A)			
	参加経験なし	ボランティア活動に興味・関心を持ったことはあるが、具体的に行ったことはない	⑤具体性あり (M)	④要求あり (D)	③興味あり (I)	①関心なし
		ボランティア活動について見聞きしたことはあるが、興味・関心を持ったことはない	②認知 (A)			

今回のアンケート調査結果を基に、各意識レベルに該当する人数を整理すると下のようになる。「興味あり (I)」(672人) が最も多く、次いで「実践 (A: 単発)」(394人)、「関心なし」(307人) となっている。以降は、この意識レベル別に属性や回答結果を眺め、気運醸成に向けたプロモーションの課題の分析を進めていく。

図表 2-35 ボランティア活動に対する意識レベル

		今後のボランティア活動への参加に対する興味・関心				
		全体	興味・関心があり、具体的にやりたいことがある(継続を含む)	興味・関心があり、なんとなくやりたいことがある	興味・関心はあるが、やりたいことはまだわからない	特に興味・関心はない
最近5年間の関心や参加の経験	全体	2000 (100.0%)	218 (10.9%)	347 (17.4%)	1072 (53.6%)	363 (18.2%)
	定期的・継続的なボランティア活動に参加したことがある	183 (100.0%)	123 (67.2%)	27 (14.8%)	24 (13.1%)	9 (4.9%)
	単発的なボランティア活動に参加したことがある	429 (100.0%)	76 (17.7%)	128 (29.8%)	190 (44.3%)	35 (8.2%)
	ボランティア活動に興味・関心を持ったことはあるが、具体的に行ったことはない	912 (100.0%)	16 (1.8%)	181 (19.8%)	672 (73.7%)	43 (4.7%)
	ボランティア活動について見聞きしたことはあるが、興味・関心を持ったことはない	443 (100.0%)	0 (0.0%)	4 (0.9%)	175 (39.5%)	264 (59.6%)
	その他	33 (100.0%)	3 (9.1%)	7 (21.2%)	11 (33.3%)	12 (36.4%)



(2) 意識レベル別の属性

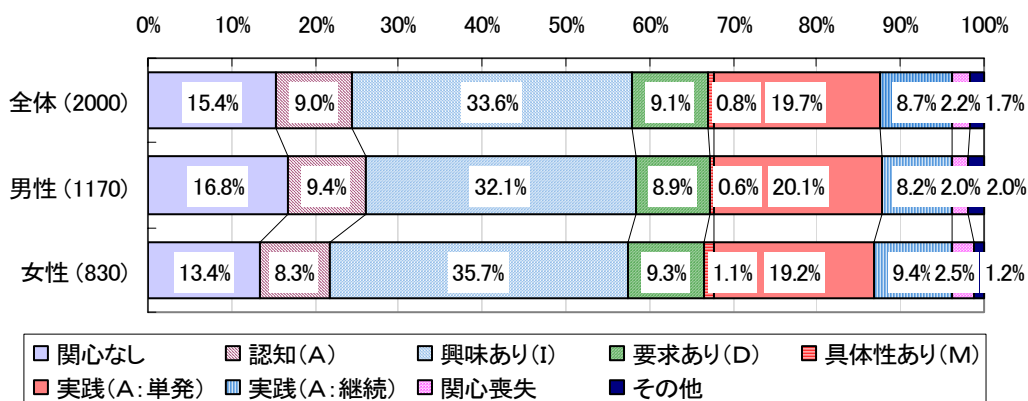
① 性別・年齢・職業

性別で見ると、男性のほうが「関心なし」の割合がやや高く、その分だけ「興味あり」の割合が女性より低くなっている。

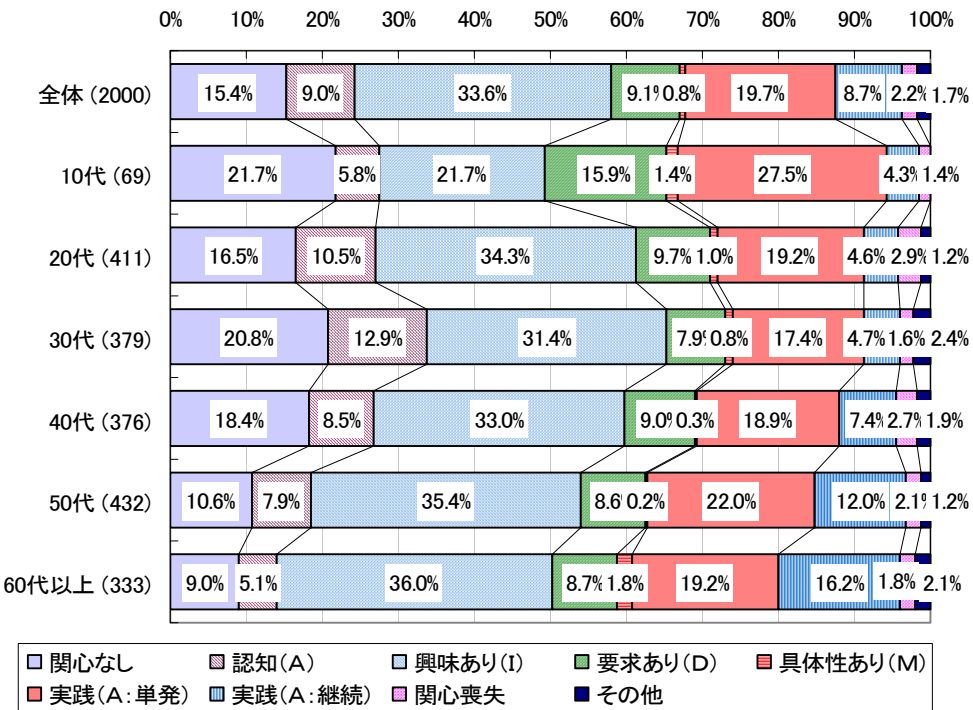
また、年代別では、年齢が高くなるにつれて「関心なし」の割合が小さくなり、継続して活動を実践している人の割合が大きくなる傾向にある。10代は「関心なし」(21.7%)の割合がすべての世代の中で最も高いが、「要求あり」(15.9%)や「実践(単発)」(27.5%)の割合も高いのが特徴的であり、この傾向は職業別の「学生」でも同様である。

職業別では、会社員など常勤雇用の人や学生は「関心なし」の割合が高くなっている。継続して実践している割合が高いのは、「無職(家事専業)」や「自営業、自由業」など、比較的自由に時間が使える人たちである。

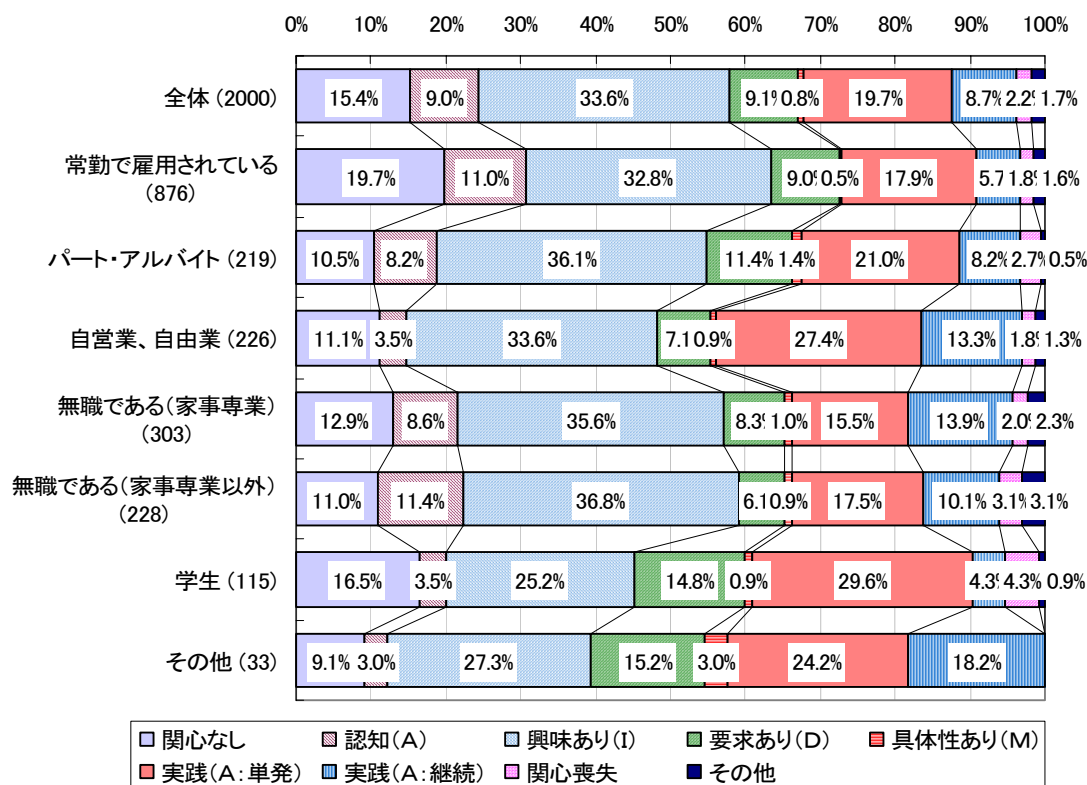
図表 2-36 回答者の性別(意識レベル別)



図表 2-37 回答者の年代（意識レベル別）



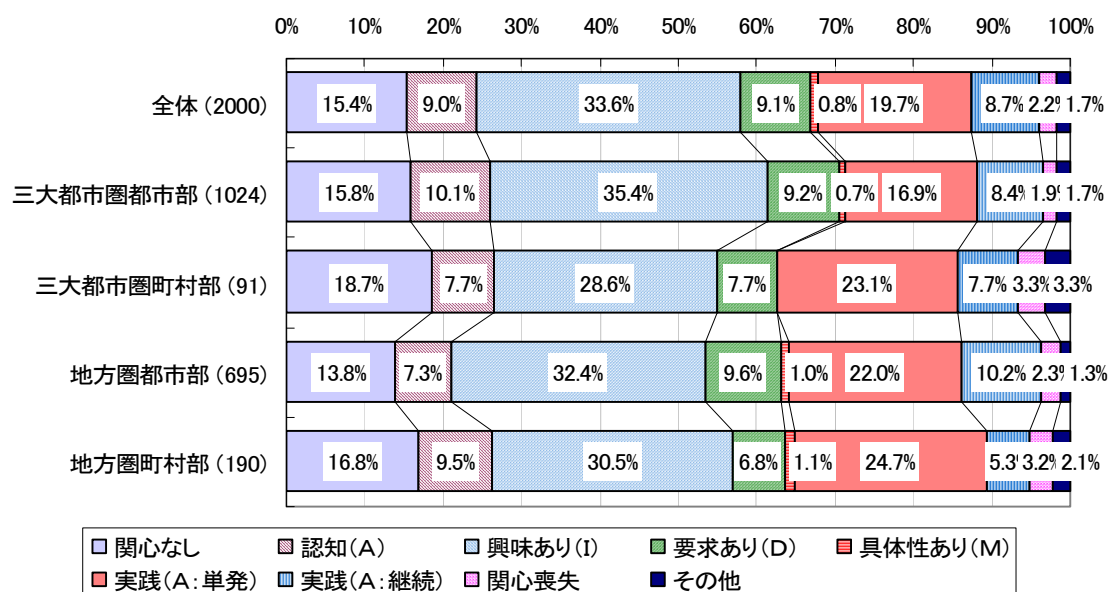
図表 2-38 回答者の職業（意識レベル別）



② 居住地域

回答者の居住地域を、三大都市圏か地方圏、または都市部か町村部という 4 つに分けて見てみると、町村部の住人のほうが都市部に比べやや関心の度合いが高い。特に三大都市圏の都市部と町村部では、単発の実践経験の割合にやや差が見られる。

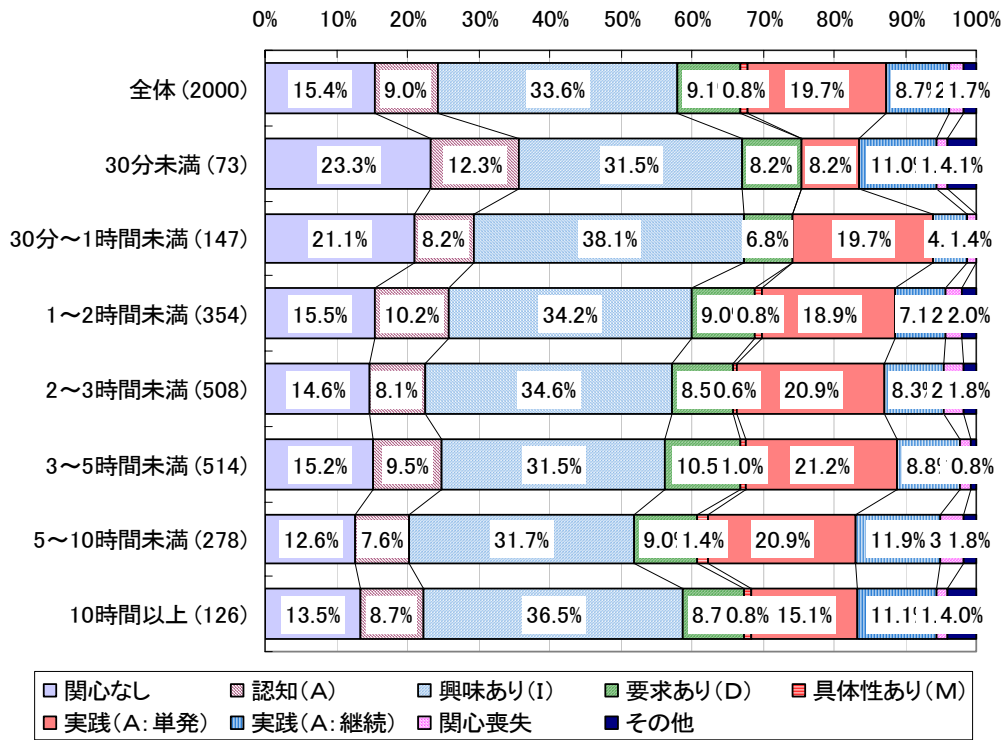
図表 2-39 回答者の居住地域（意識レベル別）



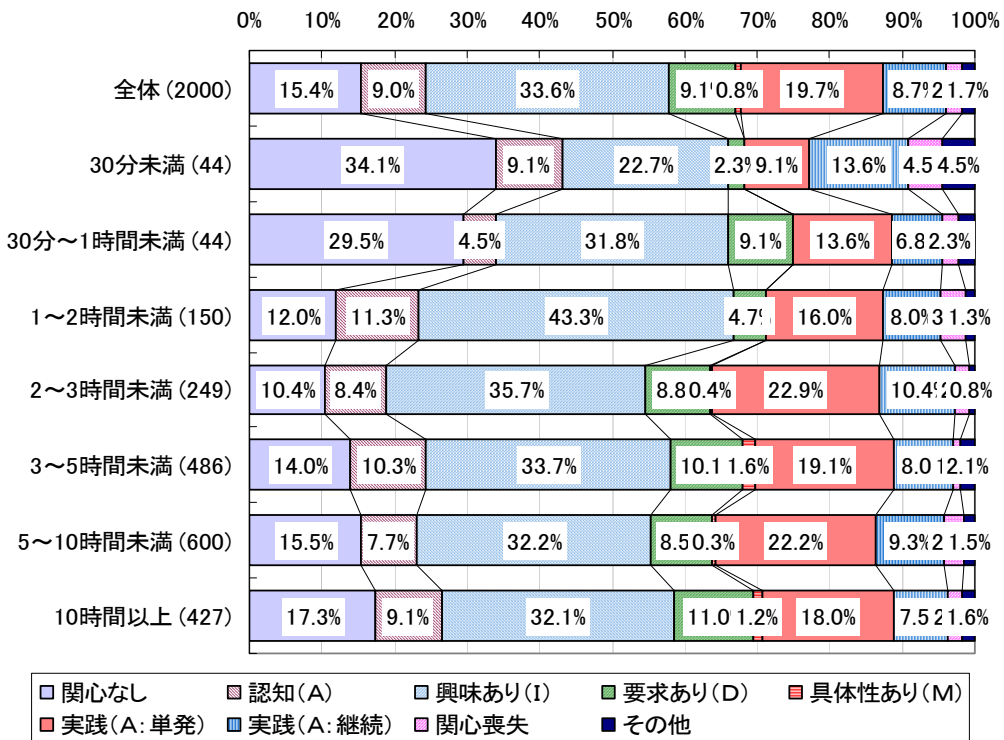
③ 自由時間

平日及び土日祝祭日の自由時間を尋ねたところ、自由時間が 1 時間未満の場合、ボランティア活動への関心がないと回答した人の割合は高い。しかし、自由時間が 30 分未満の人でも、継続して活動を実践している割合は比較的高くなっている。

図表 2-40 平日の自由時間（意識レベル別）



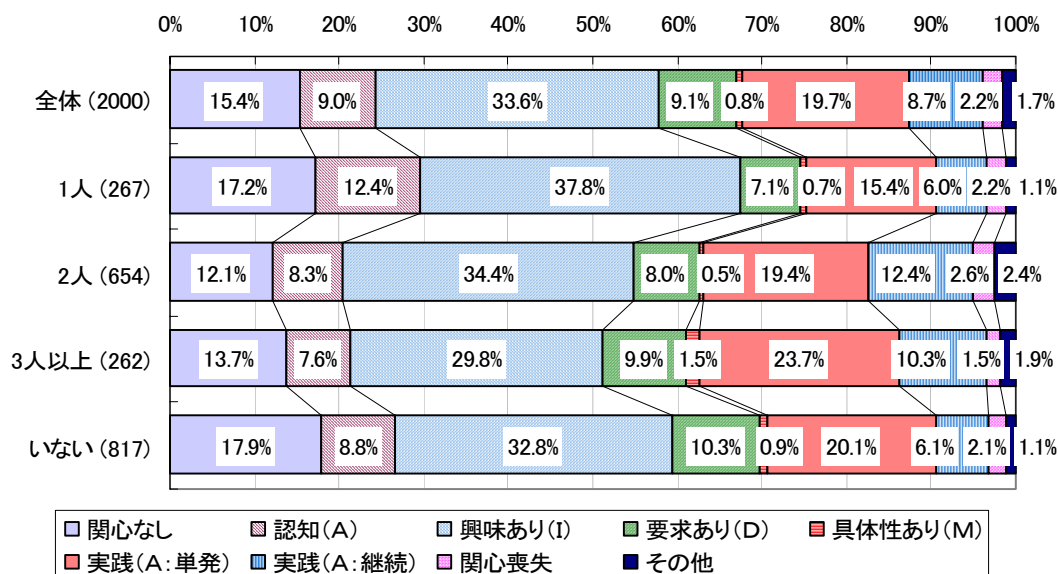
図表 2-41 土日祝祭日の自由時間（意識レベル別）



④ 子供の有無・人数

子供については、いない場合よりいる場合のほうが、また人数が多いほうが、興味・関心は高いと言えることができる。特に、単発での実践経験は子供の数が多くなるほど割合が高くなっている。

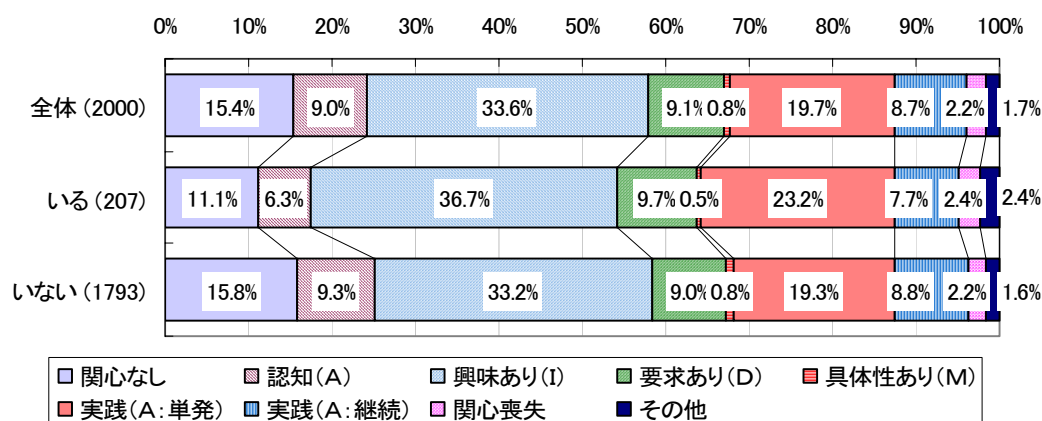
図表 2-4 2 子供の有無と人数（意識レベル別）



⑤ 介護を必要とする人の有無

家族の中に介護を必要とする人がいる場合は、いない場合に比べ、ボランティア活動への興味、及び単発での実践経験がある割合がやや高くなっている。

図表 2-4 3 介護を必要とする人の有無（意識レベル別）



(3) ボランティア活動に対するプロモーションの課題

① 暮らしのなかの助け合い（ちょぼら）を促進するための課題

i. “お互い様”意識の浸透

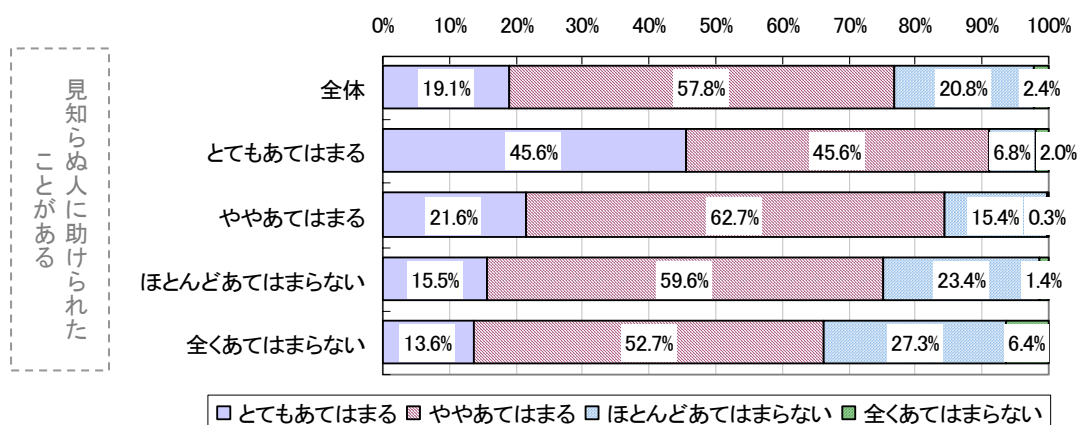
『自分が外で困っているとき、見知らぬ人に助けられたことがある』にあてはまると答えている人の9割以上が、『外で何かに困っている人を見たとき、実際に声をかけたり手助けしたりする』についてもあてはまると回答している。同様に、『近隣の友人・知人と、必要なときに実際に助けあっている』にあてはまると答えている人は、『外で何かに困っている人を見たとき、実際に声をかけたり手助けしたりする』についてもあてはまると回答している。

このことから、困ったときに人から助けられた経験を持つ者や普段から地域や友人同士での助け合いを行っている者は、見知らぬ人に対する「ちょぼら」への意識も積極化することが窺える。

一方、「暮らしの中の助け合い」を行いにくくする要因を尋ねた結果（図表 2-29）では、「声をかけた相手が、どう思うか気になる」の回答率が最も高く、せっかく手助けする意識があるにも関わらず、相手への気兼ねから手助けを躊躇していることが多いと考えられる。

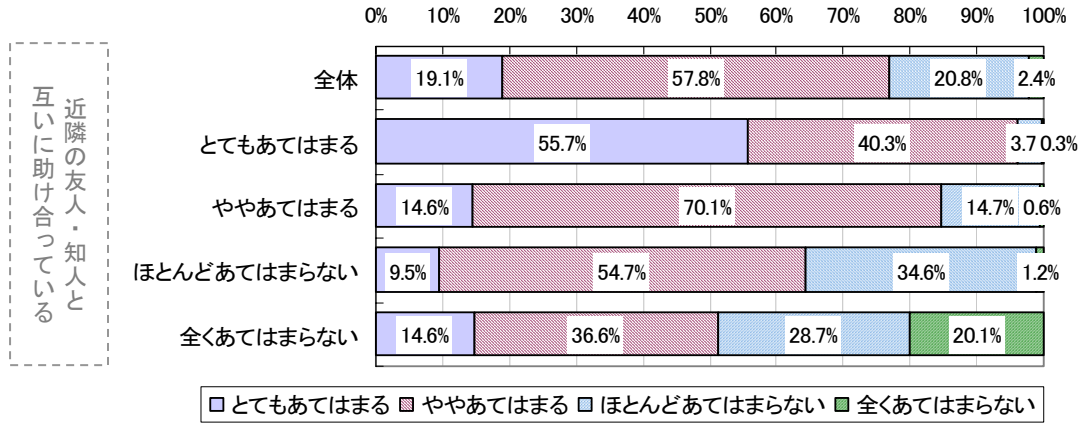
従って、「ちょぼら」を推進することだけでなく、困っているときには人の手助けを気軽に受けるという、“お互い様”という意識の浸透も同様に重要である。

図表 2-44 「見知らぬ人に助けられたことがある」
×「実際に声をかけたり手助けする」



図表 2-4 5 「近隣の友人・知人と互いに助け合っている」

× 「実際に声をかけたり手助けする」



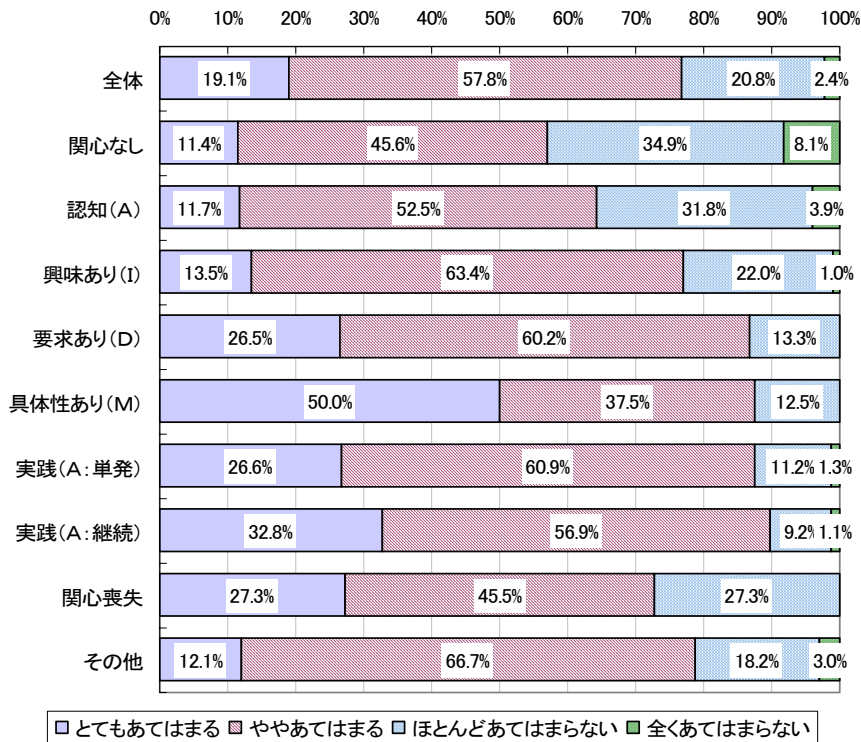
ii. ボランティアの入り口としての“ちょぼら”

『外で何かに困っている人を見たとき、実際に声をかけたり手助けしたりする』ことについて、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」と回答している者とボランティアへの意識との関連を見ると、「関心なし」から「要求あり」までは意識が高まるにつれ、「あてはまる」との回答が増加しているが、「要求あり」より意識レベルが上の層での回答率はほぼ一定である。

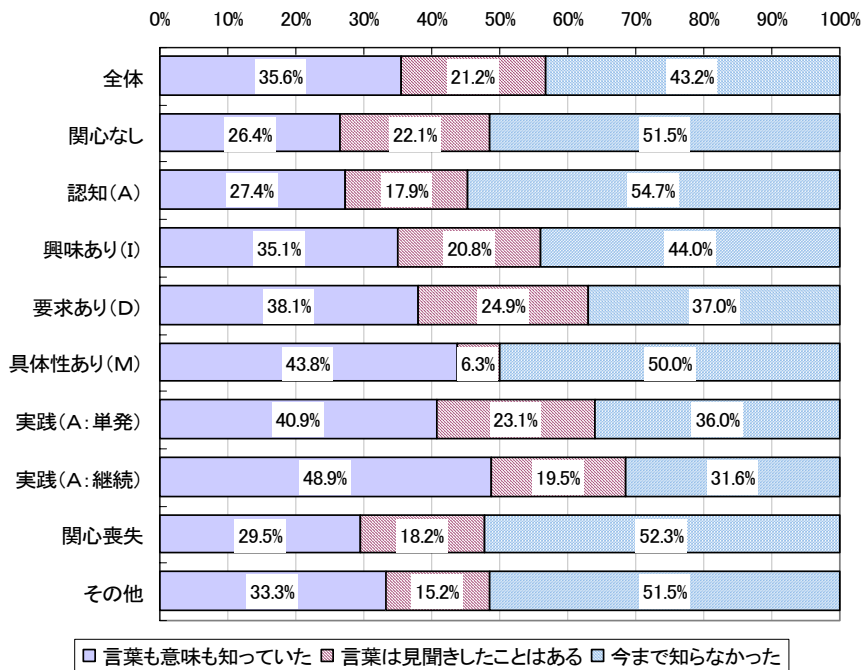
このことから、ちょぼらを促進していくことは、ボランティアに関心がなかった人にボランティアを意識させる入り口の役割を果たすことが考えられる。

また、“ちょぼら”の認知度を尋ねた結果でも、「関心なし」「認知」の層ではちょぼらの認知度が特に低いことから、ちょぼらの認知を促進することが重要と考えられる。

図表 2-4 6 実際に声をかけたり手助けする経験（意識レベル別）



図表 2-4 7 「ちょぼら」の認知度（意識レベル別）



② ボランティアに関する意識、認知を促すための課題（関心なし→A）

i. 楽しさや生きがいなどのアピール

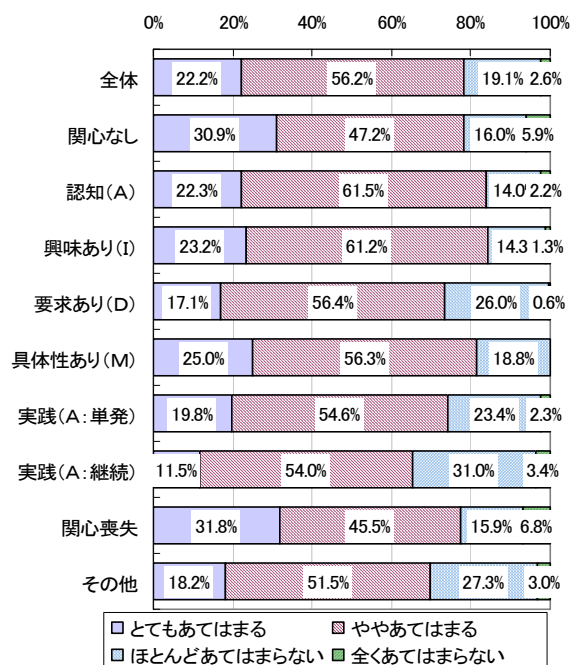
ボランティアに対するイメージを尋ねた結果では、「責任が重く大変そう」「何かと苦勞が伴う」については、関心のない層で特に高いが、ボランティアを経験した者でも回答率はさほど低下しない。ボランティアに関心のない者から実践者まで、「責任が伴う」ことについては共通的に認識されている。ボランティアに参加する上での不安や障壁を尋ねた結果（図表 2-23）でも、「いい加減なことはいできない」が最も多く挙げられている。

一方、「個人の生きがいにつながる」や「楽しそうだ」については、経験者では一定の回答率があるものの、関心のない層での回答率は低い。

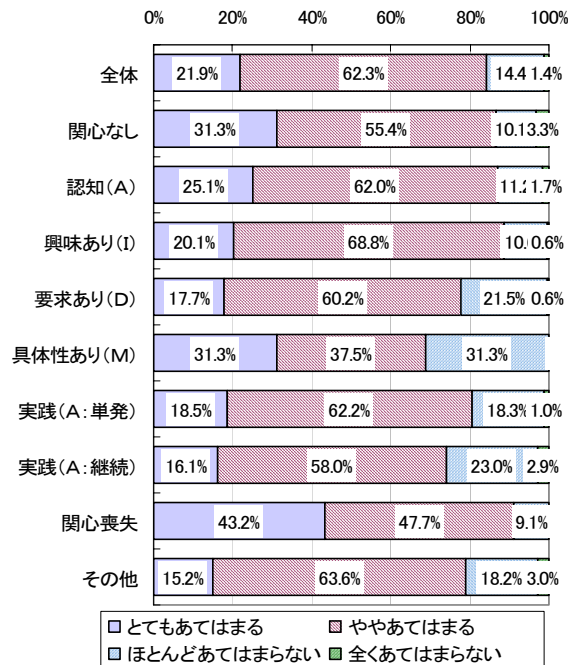
このことから関心のない層では、ボランティアのハードルとボランティアによって得られるものとのギャップが特に著しいことが窺える。活動によらずボランティア活動に一定の責任や苦勞が伴うことは避けられないことであり、それに見合う楽しさや生きがいといった面に関心のない層に対してアピールしていくことが必要である。

図表 2-48 ボランティア活動に対するイメージ（意識レベル別）

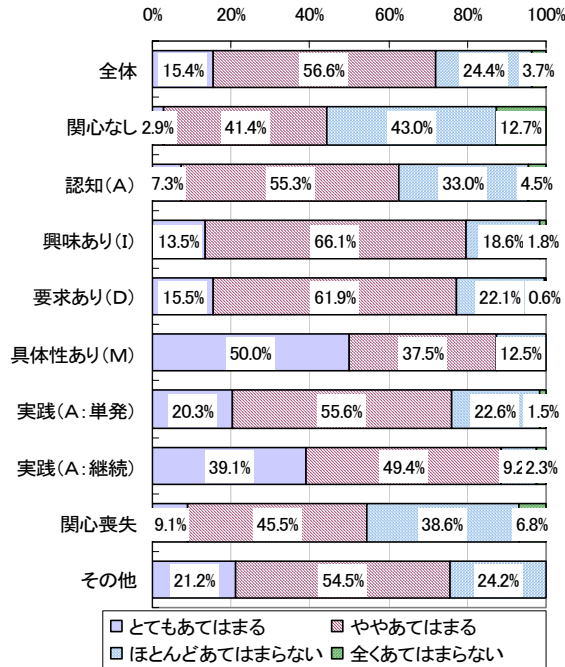
a) 「責任が重く大変そうだ」



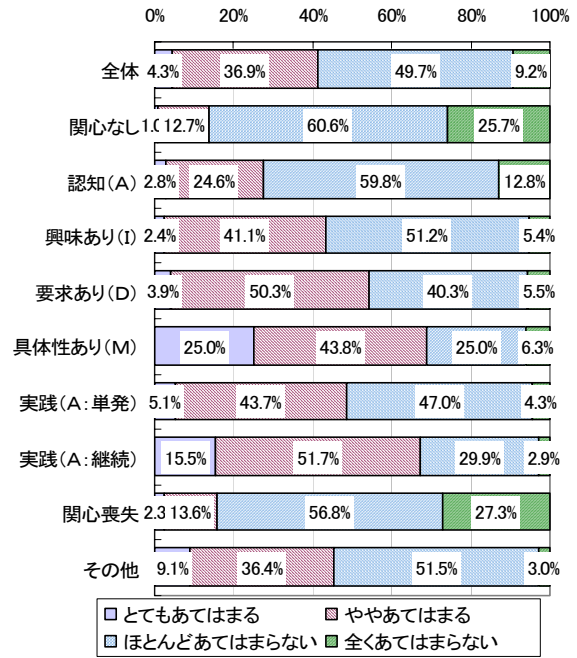
b) 「何かと苦勞が伴うものである」



c) 「個人の生きがいにつながる」



d) 「活動が楽しそうだ」



ii. 参加しやすい気軽さ

ボランティアへの積極的な参加意向を持つ者が多い一方で、「気軽さ」が求められている。「どの程度力を入れたいか」の問いに対しては約 85%が「できる範囲で無理なく」と回答している（図表 2-19）。

また、ボランティアの魅力を高めていく上で必要なことの回答結果（図表 2-30）も、「日常生活の中で無理なく」が最も多く、このほかにも「人間づきあいに煩わされない」「知識・技能がなくてもできる」「個人で気軽に参加できる」など、技能や人間関係に関する気軽さを求める意見が多い。

③ ボランティアに関する意識の具体化を促すための課題（A→I→D→M）

i. 具体的な検討ができる身近な情報

ボランティアに関するぼんやりした関心を持つ状態から、自分のやりたい活動内容や参加したい団体など、ニーズを具体化する過程では検討に資する情報提供が必要である。

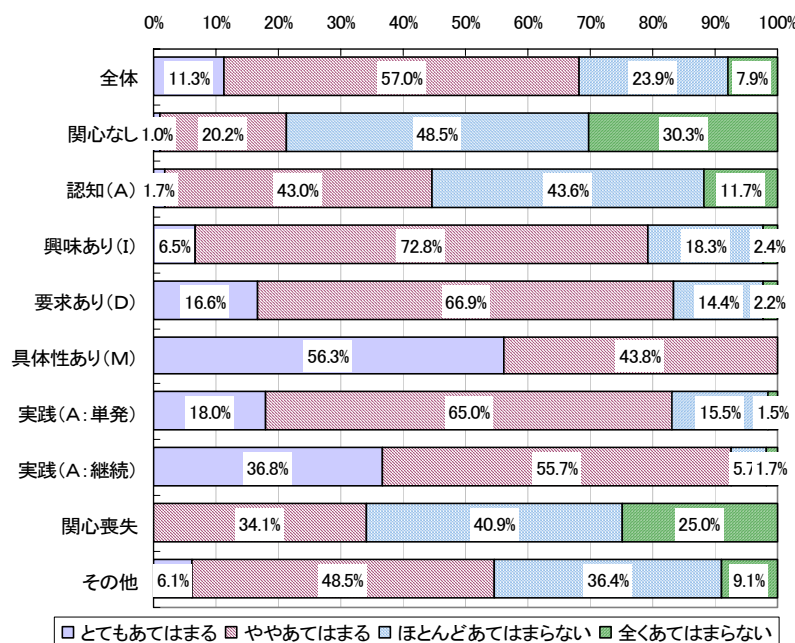
回答者にテレビ・新聞などマスメディアでボランティア情報を見て関心を持ったかどうかを尋ねた結果では7割近くが関心を持ったと回答している。ただし、「認知」と回答した層と「興味あり」と回答した層とでは回答率が大きく異なり、マスメディアへの接触が興味の喚起に大きな役割を果たしたことが窺える一方で、「興味あり」と回答した層以上では、意識レベルが上がっても回答率はさほど上がらない。

一方自治体の広報誌について見ると、全体での回答率は低いものの、「認知」「興味あり」「要求あり」「具体性あり」の層まで意識レベルが上がるほど回答率が上がっており、より自分が行なうボランティア活動を具体的に検討する上で、身近な地域からの情報が有効であることを示唆していると考えられる。

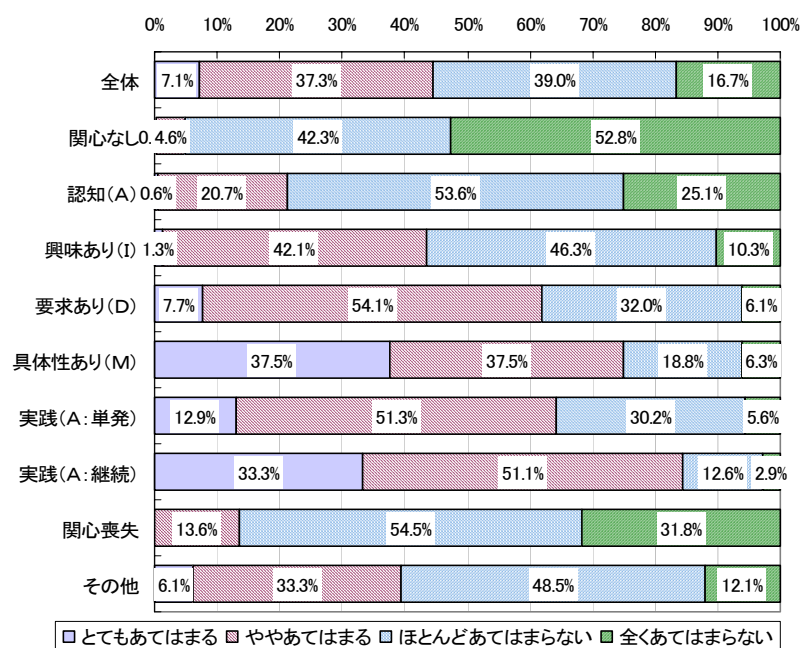
また、ボランティアに参加しやすくなるために地域に必要なサービスを尋ねた結果（図表 2-3 2）でも、「自分に適したボランティア活動に関する情報が手軽に収集できる」ことが最も多く挙げられている。

図表 2-4 9 ボランティア活動に関わる経験（意識レベル別）

a) テレビや新聞・雑誌等で、ボランティア活動や社会貢献について見聞きし、関心を持ったことがある



b) 自治体の広報誌等では、ボランティア活動や社会貢献についての
情報に興味を持って読む



ii. 学校などでボランティアを経験することによる意識の積極化

ボランティアに関して興味・関心を持つ層が、具体的に活動内容を検討していく上で、過去にボランティア活動に参加した経験（特に継続的な活動への経験）が極めて大きな影響を与える。

このことから、例えば学校などでボランティアを体験することは、その活動自体は自発的なものでないとしても、参加者の次の自発的な活動への積極化に寄与すると考えられる。

図表 2-50 「ボランティア活動の参加経験」
×「ボランティア活動参加への今後の関心」

	全体	興味・関心があり、具体的にやりたいことがある	興味・関心があり、なんとなくやりたいことがある	興味・関心はあるが、やりたいことはまだわからない	特に興味・関心はない
全体	2000 (100.0%)	218 (10.9%)	347 (17.4%)	1072 (53.6%)	363 (18.2%)
定期的・継続的なボランティア活動に参加したことがある	183 (100.0%)	123 (67.2%)	27 (14.8%)	24 (13.1%)	9 (4.9%)
単発的なボランティア活動に参加したことがある	429 (100.0%)	76 (17.7%)	128 (29.8%)	190 (44.3%)	35 (8.2%)
ボランティア活動に興味・関心を持ったことはあるが、具体的にやったことはない	912 (100.0%)	16 (1.8%)	181 (19.8%)	672 (73.7%)	43 (4.7%)
ボランティア活動について見聞きしたことはあるが、興味・関心を持ったことはない	443 (100.0%)	0 (0.0%)	4 (0.9%)	175 (39.5%)	264 (59.6%)
その他	33 (100.0%)	3 (9.1%)	7 (21.2%)	11 (33.3%)	12 (36.4%)

④ ボランティアへの実際の参加を促すための課題（M→A）

i. ボランティアの具体的な機会の提供

ボランティアの参加経験者に、参加したときの直接のきっかけを尋ねた結果（図表 2-1-7）では、「自分の自発的な意思で」（49.0%）が最も多いものの、「自治会や子ども会等」（33.5%）、「学校」（16.0%）などに機会を与えられた回答者が相当数おり、具体的な機会を提供することが直接の参加のきっかけとして重要である。

ただし、両者はいずれも子どもを通じた地域との関わりの中での参加であり、子どもを持たない層に対する機会を提供することが課題になる。

ii. 職場や学校など身近な組織内での実践者の存在

「職場や身近な友人にボランティア活動を行っている人がいるか」を尋ねた結果では、実践者では回答率が際立って高い。身近に実践者がいることから、「自分にもできる」という意識につながることや、実践者からの情報提供を受けられることなどが考えられる。

このことから企業や学校でのボランティアを促進し、各企業内・学校内に実践者を生み出し、周囲に波及させていくことが有効と考えられる。

図表 2-5 1 「職場や身近な友人にボランティア活動を行っている人がいる」（意識レベル別）

